

七月から新一万円札の図柄となる渋沢栄一。およそ五〇〇社の会社の設立、六〇〇の社会的事業の設立に関与した「日本の資本主義の父」が蘇り、自分が肖像となっている新一万円札を見たなら、何を言うでしょうか。

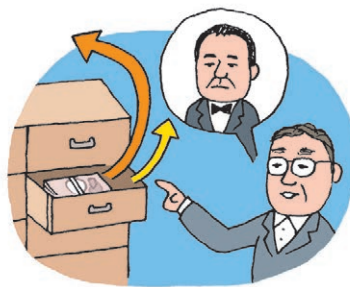
恐らく、声を荒げるでしょう。「ワシは暗いところが嫌いじゃ！」と。

暗いところとはタンスの中。つまり栄一は「タンスの中に入れておけばなしいないでくれ」と切に訴えると思います。というのも、いまの日本にはタンス預金の額が約五九兆円あるといわれているからです。手元に置くタンス預金は自分の利便性や安心のためのお金です。

一方、銀行に預けている紙幣や貨幣は、貸し出しなどへと通じて社会に循環しています。つまり、誰かの役に立っています。一方、タンス預金とは自分以外に誰にも役に立っていないお金です。しかし、五九兆円という数字を聞いてもピンとこないかもしれません。

では、五九兆円を一万円札で積み重ねていくと、どのくらいの高さになるか想像してみてください。

一〇〇万円の一万円札の束の厚さは約一センチです。ということは一千万円の束は一〇センチになります。では一億円が一メートル、一〇億円が一〇メートル、一〇〇億円が一〇〇メートル、一千億円の高さが一キロメートルです。一兆円が一〇キロでエベレスト山よりも高



絵・江口修平

新一万円札の渋沢栄一は暗いところが嫌い？

渋澤 健

く、飛行機の飛行高度ぐらいいです。ということでは、五九兆円の一万円の束の高さは五九〇キロ、つまり宇宙に届きます。

よく「日本には資源がない」といわれます。決してそんなことはありません。日本には、ただタンスの中で眠っているだけでもお金という資源が五九兆円もあるのです。銀行口座等に収めている日本の家計の現預金を全て合わせると一〇〇兆円以上です。日本はかなりのお金持ち大国なのです。

そういう意味では、日本人は理財に長じる国民と言えるのか。渋沢栄一は、否と考えていたようです。

「真に理財に長じる人は、よく集むると同時によく散ずるようなくてはならぬ」(出所:『論語と算盤』)

「よく集める」ことには長けているように見える日本人ですが、「よく散ずる」には課題があります。

「世代を超える長期投資」を日本社会へ提案したいという想いで、二〇〇八年に仲間たちと共に一般個人向けの資産運用会社を設立した身として、こども向けの「お金の使い方」セミナーを通じて学びの場を設けています。お金とは自分のための消費や貯金というMEの使い方だけでなく、社会の価値を促す寄付や投資というWEのお金の使い方があることを。大人たちにも学んでほしい本質です。



しibusawa・けん●実業家。2001年にシブサワ・アンド・カンパニー株式会社を設立。07年に株式会社コモンズ(現・コモンズ投信株式会社)を設立。岸田内閣の「新しい資本主義実現会議」構成員、金融庁の「サステナブルファイナンス有識者会議」委員など複数の政府系委員会に所属。インパクトコンソーシアム副会長、東京大学総長室アドバイザー、等。渋沢栄一の玄孫。